
ニートストーリー

pikyachu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートストーリー

【Nコード】

N8545H

【作者名】

pikyachu

【あらすじ】

在原蓮がニートになって早4年・・・彼の唯一の生きがい、パソコンに1通のメールが届く。それがこれから起こる壮大な出来事の始まりだった・・・

第一話 I a m n e e t !

今日も5畳半の部屋にパソコンのキーボード音が響き渡る。
ああ、そろそろ風呂に入って寝ないとな。

僕の名前は在原蓮、20歳。学歴は中卒、職業はらしく言うと自宅警備員、まあいわゆるニートだ。

この墮落した生活を始めてもう4年になる。別になろうと思ってニートになったわけではない。気がつくとなってしまっていたんだ。

実は僕は小学校、中学校共にともに学校に行っていない。何故か
って？

行かなくても卒業できたからだ。卒業アルバムには片隅にちゃんと
顔写真が載っていたし、卒業証書もちゃんと持ってる。

でも高校はそうはいかない。同じように不登校のままで卒業できる
と思っていたらいつのまにか退学扱いになっていた。ちゃんとテス
トの日には学校に行って点数も取っていたけど、どうやら高校つて
のは3分の1以上出席をしないと自動的に退学扱いになるらしい。

別に僕は友達は欲しくなかった。どんな高校でもよかった。ただ高
卒という肩書きが欲しかっただけ。その資格があれば大学受験も出
来る。

「高校の授業とか受験に関係ないだろw」とあの頃はネットの掲示
板に書いたりしてたけど受験が出来ないんじゃない意味がない。

退学が決まった日からは僕は完全に落ちぶれてしまった。大検をと
ろうとか、他の高校に行こうとか色々考えて1ヶ月くらいは勉強も
してたし、両親も応援してくれた。大学でのサクセスストーリーを
夢見たりもした。でもいつのまにか参考書の代わりがパソコンにな
っていた。コレが僕がニートになるまでの道のりだ。

もう今じゃ勉強なんてする気になんてとてもならないし、働くなんてもつての外。中卒なんて今時人手が足りないブラック企業ぐらいしかとつてくれないだろう。結局行き着く先はパソコンだ。

某巨大匿名掲示板で気に入らない芸能人をたたいたり、他人を煽ったり、ネットゲームに入り浸ったり、ネット上の気が合う仲間とチャットしたり・・・

そんな感じで僕の1日は終わっていく。他にすることといえば家族が寝静まった後に1階に降りて風呂に入って、歯を磨いて、たまに必要なものを買いにコンビニにいたりするぐらい。食事は1日3食母親が運んでくるからわざわざそのために家族と顔を合わすこともない。食事を運ぶ度にいちいち小言をいつてくるのがうざいけど、でもニートだから「働け！」とかそういう類の小言を言われるのは当たり前のことだから仕方ない。本当は食事を運んでくれるだけでもありがたいと思わなければいけない。

時々寝る前に「僕は何でこんな生活をしているんだろう」とか思うことがある。

でもよくよく考えてみると小中高まともに学校に行つてない僕に社会に必要なコミュニケーション能力があるとは到底思えないし、仮に就職したとしても陰口をたたかれるだろう。度重なるミス、誰も助けてくれない職場、他の社員の冷たい視線・・・マイナスの出来事しか頭に浮かばない。

今日もそうだ。僕が働くところりうるあらゆる出来事を想像すると鬱になる。働く気なんてゼロになる。企業の面接なんて大体は門前払いだろう。この空白の4年間をどう説明すればいいのか。

「中卒のニートが働くなんて所詮無理なんだ・・・」
そう呟いて眠りについた。

第一話 I a m n e e t ! (後書き)

初めて書きます！

第2話 ニートの辛さ

次の日朝8時に目覚めた。これでも僕はニートの中では生活習慣はきっちりしている方だと思う。別にニートの中に順位なんかはないけど。

母親が運んできた朝食を食べ、いつも通りにパソコンの電源をつけると出会い系やメルマガなどの見慣れたアドレスからの何通もの未読メールの中に見慣れないアドレスからのメールが届いている。件名はこうだ。

「飲みいきません？」

内容を見ると僕が今入り浸ってるネットゲーで知り合った男性からのメールで、彼は月に1回他のネットゲーマーと飲みについているらしく、それにrenさん(renというのは僕のネットでのHN)もどうですかということだった。そういえば彼とは同じニートで気が合うということで数日前にアドレスを交換したんだっけ。

他の2人の参加者も大体年齢が近いし、好都合かはわからないけどニートということだ。

むしろリア充がきたら困るか。

まあ久しぶりに外に出るのも悪くない。何はともあれ参加しますという旨のメールを送っておいた。

彼からは数分後にメールが返ってきて、今日の5時に浦和駅前に集合とのこと。

今日やるとは急だったが今更キャンセルするのもあれだったのでわかりましたと返事を返した。

その後オフ会というものについて色々調べたが、いざ参加してみるとやはりトラブルなども多々あるらしい。しかしたった1日会って

軽く飲むだけだし、全く知らない人とコミュニケーションをとるのも少しは将来何かの役に立つかもしれない。

父親が出勤し母親が買い物に出かけ、姉が大学に行ったのを見計らって僕は1階に降りてシャワーを浴び、ドライヤーで髪を乾かし、整えた。こんなことするのはもう何年ぶりかになる。だが、寝癖にパジャマで外に出るわけにもいかない。

ちなみに僕の姉は生活こそ1日中ネットをやったり、徹夜でゲームをしたりして僕と同じようなものだったのに某有名私大に普通に受かって、今は3年生である。もう半年くらい顔を合わせていないがどうせキャンパスライフを楽しんでいるんだろう。

家族が帰ってくる前に僕はリビングに置き手紙を残して家を出た。久しぶりに浴びる太陽の光はとてつもなく眩しかった。

約束の時間までは大分余裕があったので、駅前をぶらぶらと歩いた。僕がニートだと誰かわかりやしないだろうかと思いつながら歩いた。周りの視線が僕を見ているようで怖い。それも軽蔑の眼差しで。急に僕は胸が苦しくなり、路地裏に駆け込んだ。

「やっぱり昼間に外歩くのは辛いな… 少し休も… ウツ！」

僕はそこで気を失った。

第3話 理由

僕は今会社にいる。デスクで仕事に励んでいる。他の社員が何やら僕をちらちら見ながら話してる。

「聞いた？あの人中卒で元二トなんだって！」

やめてくれ…これ以上そのことを言うのはやめてくれ。

「本当？どつりで仕事できないと思った」

「あんな人雇うなんてうちの会社もどうにかしてるわね」

「もうやめてくれ！」

叫んだ後に目が覚めた。一週間に三回は見る夢だ。頭がズキズキする。そうだ、僕は誰かに殴られて気絶させられたんだっけ。

「あんた大丈夫か？」

振り向くと人がいた。頭がボサボサで僕と同じ年くらいの男性だ。よく見ると周りにはおそらく気を失って横になっている人がたくさんいた。

「あなたは誰です！？ここはどこなんです！？」

「まあそつ声を荒げなさんな。周りを見てみな、他にも気を失ってる奴がおるだろ」

「ここはおそらくトラックの荷台だ。まあ俺たちは何者かに拉致られたんだろう。」

確かに何かに乗せられてる気がする。しかしこの男は何でこんなに冷静でいられるのか。

「まあ命令に従つときや殺される心配はないはずさ。ただ下手に口答えすると次は気を失うだけじゃすまないかもな」

全く状況がのみこめない。僕はネットゲーのオフ会に行きに外に出ただけだ。そうだ、これは夢だ。いつも見る夢よりたちが悪い夢だ。しかし、頬をつねっても何も変わらない、ただただ痛みを感じるだけだった。

「ハハ、これは夢なんかじゃないさ、俺も最初は夢かと思ったけどな。まあ何で俺たちが選ばれたのかはわからないけどな」

そうだ。何で僕がこんな目にあわなきゃいけないんだ。理由でもあるのか？ たまたま僕が殴られただけなのか？

「あなたは何か思いあたることはあるんですか？例えば犯罪を犯したとか、実はスパイだとか」

男は笑って答えた。

「そんなわけないだろう。もしそうだったらとつくに捕まってるよ」

「ただ、一つだけなら心当たりがある。まあこれは俺だけかもしれないが…」

「俺は二トだ」

「な…!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545h/>

ニートストーリー

2010年10月10日05時01分発行